目　次

第一講　演習問題⑴ …… p. 2
第二講　演習問題⑵ …… p. 10
第三講　演習問題⑶ …… p. 16
第四講　演習問題⑷ …… p. 24
第五講　演習問題⑸ …… p. 30

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

「X皇后宮(こうごうぐう)、Y上東門院(じょうとうもんいん)、いづれか今少しめでたくおはしましける」と言へば、「皇后宮、御みめもうつくしうおはしましけるとこそ。院も、いと御志深くおはしましける。失せさせ給ふとて、

A　知る人もなき別れ路に今はとて心細くも思ひ立つかな

B　夜もすがら契りしことを忘れずは恋ひむ涙の色ぞゆかしき

など詠ませ給ふらむこそ、あはれに侍れ。のちに御覧じけむ帝の御心地、まことにいかばかりかはあはれにおぼしめされけむ。

さて御Pわざの夜、雪の降りければ、

C　Q野辺までに心ひとつは通へども我がみゆきとは1知らずやあるらむ

と詠ませ給へりけむも、いとこそめでたけれ。おはしまさぬ後(あと)まで、さばかりの御身に、2御目も合はずおぼしめし明かしけむほどなども、返す返すもめでたし。

また中関白殿（なかのかんぱくどの）隠れさせ給ひ、また内大臣（うちのおとど）流されなどして、御世の中衰へさせ給ひてのち、かすかに心細くておはしましけるに、頭中将それがし参りて、簾（す）のそば、風に吹き上げたるより見給ひければ、いたく若き女房の清げなる、七八人ばかり、色々の単襲（ひとへがさね）、裳（も）、唐衣（からぎぬ）などもあざやかにてさぶらひけるも、いと思はずに、今は何ばかりをかしきこともあらじと[3]思ひあなづりけるも、あさましくおぼえけるに、[4]庭草は青く茂りわたりて侍りければ、『などかくは。これをこそ払はせておはしまさめ』と聞こえ給ひても、宰相の君となむ聞こえける人、『露置かせて御覧ぜむとて』といらへけむこそは、[5]なほ古（ふ）りがたくいみじくおぼえさせ給へ。

上東門院の御事は、よし悪（あ）しなど聞こゆべきにもあらず。何事もめでたきためしにはまづ引かれさせ給ふ時なれば、とかく申すに及ばず。何事も御幸ひ極めさせ給ふあまりに、御命さへこちたくて、あまたの帝におくれさせ給ふこそ、[6]口惜しく侍れ。そのたびに、いとあはれなる御歌ども詠ませ給ひたるは、やさしくこそ侍れ。

一条院隠れさせ給ひて、

　逢ふことも今はなき寝（ね）の[7]夢ならでいつかは君をまたは見るべき

など詠ませ給へるも、いとめでたくこそ侍れ。

また、顕基（あきもと）の中納言の御返事（かへりごと）に『世は二度（ふたたび）はそむかざらまし』など侍るも、いとあはれなり。

何事よりも、優なる人多くさぶらひけむこそ、いとど心にくくめでたくおぼえ侍れ」と言へば、「その御妹（おとうと）の枇杷（びわ）殿の皇太后宮と聞こえさするにこそ、いと華やかに物好みしたる人々多くさぶらひけれ。大和宣旨（やまとせんじ）も、その宮の女房なるべし。折々の女房の装束、打出（うちいで）なども、ためしなきほどに制を破り、女房の一品経供養（いっぽんきょうくよう）などしけることも、いとおびたたしく侍りけれ。

女院には、さばかり名を残したる人々さぶらひけれど、さやうのことなども、人の目驚くばかりはあらじ、とつつませ給ひけむほど、さまざま心の色々見えて、めでたくこそ侍れ。」

（『無名草子』）

〈注〉

○皇后宮…藤原道隆の娘、定子のこと。一条天皇皇后。

○上東門院…藤原道長の娘、彰子のこと。女院も同じ。一条天皇中宮。

○院…一条天皇のこと。一条院も同じ。

○帝の御心地…帝は一条天皇のこと。
○中関白殿…藤原道隆。
○内大臣…藤原伊周（これちか）。定子の兄。
○宰相の君…定子に仕える侍女。
○『世は二度はそむかざらまし』…源顕基の歌に対する彰子の返歌「ときの間も恋しきことの慰まば世は二度も背かざらまし」を指す。
○その御妹の枇杷殿の皇太后宮…藤原道長の次女で彰子の妹、妍子。三条天皇中宮。
○打出…牛車や建物の簾の下から、衣の一部をわざと出すこと。出し衣（いだしぎぬ）。
○一品経供養…『法華経』を一品ずつ各人が書写し、供養すること。

問一　和歌A・Bの作者は誰か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　定子
b　彰子
c　一条天皇
d　『無名草子』の作者

問二　二重傍線部P「わざ」、Q「野辺」の意味として、正しい組み合わせのものを次の中から一つ選べ。

a「わざ」…出家　「野辺」…庵（いおり）を結ぶ場所
b「わざ」…退出　「野辺」…実家に帰る道中
c「わざ」…葬送　「野辺」…火葬が行われる地
d「わざ」…門出　「野辺」…旅人を見送る所

問三　和歌Cの説明として正しいものを次の中から一つ選べ。

a　定子を思って一条天皇が野辺を訪れたことは、きっと誰も知らないだろうという意味の歌である。
b　自ら訪れることは出来なくても、その心だけはついて行っていることを詠んだ一条天皇の歌である。
c　雪が降っているのを、これは一条天皇が訪れてくれたのだと思って、なつかしんでいる定子の歌である。
d　定子の思いが雪となって一条天皇のもとに降りそそぐのを人々に知ってほしいという意味の歌である。

問四　傍線部1「知らずやあるらむ」を現代語訳せよ。

問五　傍線部２「御目も合はず」とはどういう意味か。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　相手を御覧になることもできず

ｂ　正気を失われて

ｃ　お眠りにもなれず

ｄ　涙があふれなさって

問六　傍線部３「思ひあなづりける」とはどういうことか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

ａ　「頭中将それがし」は、定子が、身内を失って悲しみに沈んでいるはずの時であるのに、若い女房たちを集めてきらびやかに暮らしているのを軽蔑していた。

ｂ　「頭中将それがし」は、時勢が変わってしまったので、定子の所を訪ねても、何も興味深い話を聞くことはできないだろうと、軽く見ていた。

ｃ　「頭中将それがし」は、頼りとする父や兄を失ってしまった定子のもとには、心もとない若い女房しかいないだろうとあなどっていた。

ｄ　「頭中将それがし」は、定子の暮らしを、一家の勢力がすっかり衰えたので、何も優雅なことはないだろうと見下していた。

問七　傍線部4「庭草は青く茂りわたりて侍りければ」、5「なほ古りがたくいみじく」について、次の問に答えよ。

Ⅰ　庭草が茂っていることに対して、定子側はどのように説明しているのか。説明せよ。

Ⅱ　Ⅰのように定子側が強弁したのを、『無名草子』で、「なほ古りがたくいみじく」と評価したのはなぜか。説明せよ。

問八　傍線部6「口惜しく侍れ」とあるが、なぜか。次の中からもっとも適切なものを一つ選べ。

a　彰子は、女性としての幸福を極めるあまり、命ははかなくて、その短命を何代もの天皇が悲しんだから。
b　彰子は、幸いを極めるあまり寿命が長くなく、何代もの天皇の行く末を見届けられずに、亡くなってしまったから。
c　彰子は、幸いを極めるあまり、夫まで長寿であったために、二人で後の何代もの天皇を見送らなければならなかったから。
d　彰子は、何事にもこの上ない幸いを持っていたあまりに、寿命まで長く、そのため何代もの天皇に先立たれてしまったから。

問九　傍線部7「夢ならでいつかは君をまたは見るべき」を現代語訳せよ。

問十　波線部X「皇后宮」、Y「上東門院」について、本文中ではこの二人をどのように評価しているか。次の中から適切なものを、X、Yそれぞれにつき二つずつ選べ。

a　天皇が亡くなるたびに、とても心打たれるような和歌を詠むなど、和歌の才能が抜きん出ていた。
b　亡くなった後も一条天皇に深い悲しみを抱かせるなど、一条天皇にこの上もなく深く愛された。
c　すばらしい人の例として、真っ先に挙げられる人で、すばらしいかどうかは議論するまでもない。
d　逆境にもめげず、常に情趣あるさまを保ち、風流を好み気高く生きた。
e　多くのすぐれた女房がお仕えしているのに、衣装や催し事など様々について、華美にはせず慎み深くあろうとした。
f　他の后たちに負けず、自ら様々に趣向を凝らし、仕えている女房達にも気を配って一条天皇の時代をもり立てた。

模範解答

第一講　演習問題(1)

〈模範解答〉

問一　a　**問二**　c　**問三**　b
問四　(亡き皇后は) わからないでいるだろうか
問五　c　**問六**　d
問七　Ⅰ　茂った庭の草にわざと露を置かせて、風情を観賞するためと説明している。
Ⅱ　没落して逆境の状態の中で、昔と同じように風流心を忘れずに気高く生きていることに感動したから。
問八　d
問九　夢ではなく、(現実に) いつあなたにまた逢えるでしょうか、いや、お逢いすることはできません。
問十　X　b・d　Y　c・e

〈現代語訳〉

「皇后宮定子と上東門院彰子と、どちらがいっそうすばらしくいらっしゃったか」と言うと、「皇后宮は、ご容貌も美しくいらっしゃったという。院 (＝一条天皇) も、たいそうご愛情が深くていらっしゃった。お亡くなりになる時に (定子が)、

知る人も……＝誰も知る人もいないあの世へ別れて行く旅路に、もうこれで (お別れです) と、心細くも決心することよ。

夜もすがら……＝一晩中愛を誓ったことを忘れないならば、(死んだ私を) 恋い慕って流す涙の色 (が悲しみの血の涙であるか) を見たい。

などと詠みなさっていることは、しみじみとします。後に (この歌を) ご覧になった一条天皇のお気持ちは、本当にどれほどしみじみとお思いになったことでしょうか。

さて、(定子の) 御送葬の夜、雪が降ったので、

野辺までに……＝火葬が行われる野辺まで、心だけはついて行くのだが、これが行幸とは（亡き皇后は）わからないでいるだろうか。

と詠みなさったということも、たいそうすばらしい。お亡くなりになった後まで、あれほどの（高貴な）御身で、お眠りになれず（定子のことを）お思いになって夜を明かしたということなども、本当にすばらしい。

また、（定子の父である）中関白殿〔＝藤原道隆〕がお亡くなりになり、また（定子の兄の）内大臣〔＝藤原伊周〕が流罪になりなどして、ご一家の勢力がすっかり衰えてしまわれた後、ひっそりと心細くていらっしゃった時に、頭中将某が参上して、簾の近くで、風が吹き上げたところから（中を）見なさったところ、ひどく若い女房で美しい女房が、七、八人ほど、色とりどりの単襲や、裳、唐衣なども鮮やかなのを着てお仕えしていたのも、たいそう意外で、「今はどれほど趣深いこともないだろう」と見下していたのも、驚きあきれたことに思われたが、庭草は青く一面に茂っていましたので、『どうしてこのように（しておくのか）。この草を刈らせていらっしゃるのがよい』と申し上げなさっても、宰相の君と申し上げた（定子の）侍女が、『（定子様が）露を置かせてご覧になろうとなさって（わざと草を刈らないのです）』と答えたということは、やはり（没落して逆境の境遇でも）昔と変わらず（風流心を忘れず気高く生きていることが）すばらしく思われなさる。

上東門院のことについては、善し悪しなどを申し上げてよいことでもない。何事もすばらしい例としてはまず引かれなさる世なので、（私が）あれこれを申し上げるまでもない。何事もご幸福を極めなさるあまりに、ご寿命までも長くて、多くの天皇に先立たれなさったのが、残念です。（天皇が崩御なさる）そのたびに、たいそうしみじみとした歌を詠みなさったのは、優美です。

一条天皇がお亡くなりになって、

逢ふことも……＝もう逢うことも今はなく、泣いて寝た夢ではなく、いつまた（現実に）いつあなたにまた逢えるでしょうか、いや、お逢いすることはできません。

などと詠みなさっているのも、たいそうすばらしいです。

また顕基中納言（の歌）に対するご返事に、『（少しの愛でも恋しい気持ちが慰められるものならば）この世を二度も背いて剃髪することはなかっただろう』などございますのも、たいそうしみじみと心打たれる。

どんなことよりも、すぐれた女房たちが多くお仕えしていたとかいうことが、ますます奥ゆかしくすばらしく思われます」と

言うと、「その（彰子の）御妹君の枇杷殿の皇太后と申し上げた方のところには、たいそう派手に物を選り好みした女房たちが多くお仕えしていた。大和宣旨も、その宮の女房なのだろう。（何かある）折ごとの女房の装束や、打出の衣なども、例がないほど派手にして禁制を破り、女房が一品経供養などをしたことも、たいそうはなはだしい（華美な）ものでございました。

上東門院のところには、あれほど後世に名を残した（すぐれた）女房たちがお仕えしていましたが、そのような（衣装や催しの）ことなども、『人が見て驚くほどのことはすまい』、と（彰子自身が）慎み深くなさったということは、さまざまに（女房たち）それぞれの心の様子が見えて、すばらしいです」。